

Swash (Sex work and sexual health)

おはな

会議概要

2020 年 7 月 6 日～11 日 オンライン開催

関連分野：セックスワーク、トランスジェンダー、コミュニティーレベルでの HIV を含む STI の予防政策など。発表はワクチン開発等の先端医療系と検査や治療の啓発や政策系があり、主に後者の発表に参加した。

参加したセッションについて

・エイズと非犯罪化について

HIV/AIDS に関わる様々な分野の非犯罪化について各分野の専門家が持ち寄って発表した。薬物、同性間の性交渉、HIV 陽性ステータスそのものがとりあげられた。薬物使用者（PWID）に関してはポルトガルでの 2001 年に薬物の個人使用と所持が非犯罪化された例について（合法化ではない）の発表があった。当時ヘロインの使用や STI の蔓延が懸念されていたが、非犯罪化により針の使いまわしの減少、薬物による収監者の減少、予算が刑務所の管理等から保健分野へ再配分されるなどの要因により、薬物使用者間での HIV 新規陽性が大きく減少した。また、法改正時に心配された薬物使用の広がり確認されていない。どの分野でも非犯罪化により罪に問われる恐れがなくなることで、HIV を含む STI の積極的な検査の受診や早期治療に繋がるとされている。残念ながらこの一連の発表にセックスワークは含まれていなかった。

・トランスジェンダーと HIV・エイズについて

トランスジェンダーに関する複数の発表に参加した。その中でも特に医療ケアとトランス男性や AFAB（出生時に女性に割り当てられた人）ノンバイナリーに関する発表がとても参考になった。まずトランスジェンダーは WHO から必要性が提唱されているにも関わらず調査研究が十分に行われていない。様々な差別や社会的障壁による医療アクセスの困難だけでなく、PrEP の使用等に関しても、ホルモン治療をしている場合はホルモンバランスや性器の細胞の変化により STI の感染リスクや予防薬の効果が変化するとされているが、まだ十分な研究が行われていない。アメリカでは PrEP が必要なトランス男性のうち、実際に使用している（できている）人の割合は一割程度との報告も存在する。発表者からは、

今後の改善点としてトランス、特にトランス男性や AFAB ノンバイナリーの人々が研究対象になるだけでなく、実際に研究に関わり、有給で主導的なポジションになることが重要であると結論付けていた。

国内での還元計画

- ・ 活動団体 Swash 主催のエイズ会議報告会を 8 月にオンラインで実施（日程調整中）
- ・ 2020 年度開始の「HIV 受検勧奨に対する効果的な介入に向けた研究」（代表：今村顕史）への貢献

会議の感想

本来アメリカでの開催が予定されていたが、新型コロナウイルスのパンデミックの影響によりバーチャル会議に変更になった。初めて大規模なバーチャル会議に参加し、実地開催との違いや参考となった知識等について簡単にまとめる。

- ・ **費用**：普段の国際会議は会場設備の使用費等を含め、参加するための費用が大変高額であり、会議登録料は出身国や収入により割引される場合もあるが、渡航費・滞在費も含めると金銭負担ができない参加希望者も多い。今回の会議はオンラインでの会議登録料のみでアクセスがしやすくなった。

- ・ **オンデマンド配信**：4つのチャンネルから生中継される他に、多くの発表がビデオやポスター形式で会議期間全体にわたり閲覧が可能であり、参加したいセッションの時間帯の重複を防ぐことができる。また参加したいセッションのみ見することも可能である。時差の関係で参加できないセッションも発生するため、後から再生できる方式の配信が便利である。また今回はライブ配信のものも参加者同士のチャット欄が設けられておらず、質問は参加者同士が討論する形式が基本であった。オンラインでは直接質問ができるため、ライブ配信にはチャット機能が設けられると良い。

- ・ **参加者同士の交流**：プラットフォーム上の参加者同士のチャット機能が設けられていたが、会食などもないことからやはり実地開催に比べると交流の場は限られる。その一方で以前参加した実地の会議ではネットワーク作りに重きをおく人が多く、発表を聞く人が減ってしまう状況も見られたため、個人参加をしている立場としては会議の内容に集中できてよかった面もある。Twitter 上では #aids2020virtual というハッシュタグを使用し、運営側や参加者が投稿を行っていた。

- ・ **資料配布**：発表画面のスクリーンショットができる他、別に資料のフォルダーがあり、各自希望する資料をダウンロードできる。発表人数の多い会議の場では配布資料が多く持ち帰りが困難であることも多いため、実地開催でも活用されることを望む。また関連映画や文化発表も一覧から配信されており、本会議以外にも内容面では実地開催にも劣らない効率の良い配信だと感じた。

- ・ **字幕及び通訳**：配信はすべて英語で行われ、通訳及び書き起こし等の合理的配慮は行わ

れていなかった。SNS を通じて運営にコメントを提出したが今のところ返信はない。オンライン配信では音声の同時通訳は困難であるものの、英語での自動書き起こし、録画であれば多言語の英語字幕配信も技術的には十分可能である。2019 年の ILGA ではスペイン語の音声通訳（一部セッションはスペイン語で開催）と一部手話通訳が行われていた。一セッションのみウガンダから手話での発表があり、手話通訳の方が同時に音声で発信をしていた。ろう団体やアフリカフランス語圏からの参加も多く、アクセシビリティの向上のため英語での音声自動書き起こしが最も現実的な合理的配慮だと感じた。